

氏 名	宇城 翔子		
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第14号		
学位授与年月日	平成29年3月24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者		
題 目	学位論文題目	京都文化博物館所蔵「誓願寺門前図屏風」の復元研究	
	研究作品題目	復元模写研究： 1) 《京都文化博物館所蔵「誓願寺門前図屏風」想定復元模写》 創作研究： 2) 《哀情》 3) 《悲しみを取り除く》 4) 《紫陽花の刻》 5) 《うつろひ》 6) 《憂愁》	
論文審査委員	主 査	教授	北田 克己
	副 査	教授	岡田 眞治
	副 査	准教授	岩永 てるみ
	外 部	京都府京都文化博物館	
	審査委員	学芸員	西山 剛

1 学位論文の要旨

復元模写研究の対象作品である京都文化博物館所蔵「誓願寺門前図屏風」二曲一隻屏風（紙本着色 本紙丈幅 151.9×166.4 cm）には洛中の東端に位置する誓願寺と、その周辺の町家、参詣する人、産業を営む人等、多くの事物が描き込まれている。近世初頭の京都の都市景観を捉えており、舟木本「洛中洛外図屏風」と作風や描写が類似するため、舟木本「洛中洛外図屏風」と近い時期に岩佐又兵衛勝以（1578～1650）が中心になって描いたもの、または同一工房の画人によって描かれたものとされる。本作品は、1991年度に京都文化博物館が古美術商から購入し、古美術商以前は古美術収集家が所蔵していたようだが、伝来の詳細は不明である。

本作品の魅力は人物表現の繊細な描写にあり、単なる風俗画にとどまらない豊かな表現世界を実現している。描かれている範囲は、三条通や寺町通をクローズアップしており、誓願寺と周辺のにぎわいを表現しているように見える。しかし、本作品の現状は、汚損や後補による裁断や乱雑な着色が目立ち、制作当初の表現が損なわれた状態である。全体の黒ずみや不鮮明さのため、ディテールの視認が容易ではなく、線描や彩色の残る箇所の魅力のある図様を見えづらくさせている。さらに左扇と右扇の紙継ぎの位置がわずかながら上下にずれている点や、左右扇間には明らかに図様が連続しない箇所が存在し、一隻として屏風を観たときに違和感を覚える要因となっている。これらのズレや、絵の中で連続しない図様からは、後世の改装時に幾分かの縮小がなされ、その都度欠損箇所を補うための

加筆が施されてきたことが想定できる。

よって、本研究ではこのような傷や汚れを取り除き、現存箇所の変色・剥落の復元を試み、想定復元模写の作成を行うことで、描かれた当初の絵画の印象を取り戻すことを目的とした。

復元の際の基底材及び復元サイズの決定は、原本の紙の継ぎ目や幅から、当時襖や屏風に使用されていた雁皮紙であると推測し、本研究では成子製紙の雁皮紙を縦幅1尺1寸4分になるように裁断したものを5枚紙継ぎし、裏打ちしたものを使用した。

赤外線画像や類似作例との比較、現存箇所の線描の切れや屋根のゆがみの修正、後補描写の除去、欠損箇所の復元考察の結果から、欠損範囲を推測することができ、二扇を連続する一画面であったとし、復元案を作成した。これらの復元考察から、欠損範囲は最下部の紙縦幅が左扇2寸5分、右扇2寸7分、最上部の紙縦幅は左扇3寸7分、右扇3寸5分、両扇間の欠損は各扇7分の欠損で合わせて1寸4分、屏風両端の横幅は各扇2寸7分の欠損があったと推測できた。

よって復元図の1扇の本紙丈は5尺6寸3分、幅は3尺1寸となり、2扇合わせた本紙丈は170.9cm、幅は188.0cmとなった。原本2扇の本紙丈151.9cm、幅166.4cmであるため、丈が19.0cm、幅が21.6cm増えたものが、本研究では復元サイズであると想定して進めた。

図様の復元作業は、剥落や変色部周囲の現存している部分から考察し、同時代の洛中洛外図や又兵衛工房による類似作例を手掛かりに進めた。原寸大ポジフィルムを活用し、熟覧調査で実施した赤外線撮影に基づく部分ごとの復元案の考察と、収集した資料や検証結果を照らし合わせて得られる知見から、復元図作成の道筋を考察し、復元模写を作成した。

本研究の復元図の作成から、制作当初の線描や彩色を復元した画面状態を観察することが可能となり、原本の制作当初が復元図のような両扇の絵が違和感なく繋がった絵であったことや、画面右側にもう一隻分の絵が存在していた可能性が強まった。また、金雲や樹木や河川の再現と、建物の整然さを蘇らせたことで、桃山時代の風俗画や、他の岩佐派作品にみられる鮮やかな人物彩色を再現することができ、情景描写が人物の営みの描写に与える影響と、その役割の重要性を認識することに繋がり、当時の美意識に迫ることが可能となった。

復元案考察時の様々な洛中洛外図に描かれる、本作品と同モチーフの図様の描写箇所との比較検証からは、本作品は江戸時代初期の1615～1624年の間の事物を描いたものと判断できた。岩佐又兵衛の生涯は江戸時代初期の1578～1650年であり、1615～1624年の間の事物を描いた本作品に、又兵衛自身も携わることが可能であった事が推測できる。

本作品と同時期作と考えられる岩佐又兵衛作の舟木本「洛中洛外図屏風」（東京国立博物館所蔵）や「豊国祭礼図屏風」（徳川美術館所蔵）との比較検証からは、人物やモチーフを個々に抽出する事による類似箇所の存在を確認する事ができ、「かぶきもの」の描写の類似性のみでなく、構図及び出現モチーフの類似性が各所に確認できた。さらには、1615～1624年の間は又兵衛が福井で活躍した時代（1617～1637年）と重なり、制作者が舟木本「洛中洛外図屏風」を描いた又兵衛京都時代の工房の可能性、「豊国祭礼図屏風」との類似性が多いことから又兵衛福井時代の可能性が想定できた。以上のことから、又兵衛自身の本作品への関与の可能性が深まり、これらの作品に携わった絵師が本作品の制作に関わっ

た事が有力となった。

本研究の復元模写作業の各所決断には、これまで経験してきた模写や古典絵画の彩色知識の他にも、日本画家の視点からの彩色や画面構成感覚が多分に影響している。また、学部・博士前期課程で行ってきた古典絵画の模写研究を経て、博士後期課程における復元模写研究を本格的に行った事が、自身の創作活動に与えてきた影響は計り知れない。よって、自身の博士後期課程時に行った創作作品である「女性美と自然美が織りなす空間の創造」をテーマとし描いたものも創作研究作品とし、作品集を付す。

自身は、人間には「非現実的な作られた空間に身を置き、ありふれた日常から逃避したい瞬間」が存在すると感じている。誰しもが生きていく中で抱く悩み苦しみを、ふとした時に見せる女性の何気ない美しさにのせて美的に描く事により、それを昇華し謎めいた複雑な美に繋げている。女性のふとしたときに見せる表情と、自然界でまきおこる美しいと169 思うふとした現象を、人物と同一画面上で同等に扱い、感情を描き伝えられる絵画表現を指す。育ってきた環境が個々に影響を与え特徴を作り出すように、周囲の情景の変化により造り出される空間が、視覚的に与える影響と効果を追究する。

《哀情》・《悲しみを取り除く》では、悲しみに徐々に飲み込まれていく心情を、時の経過や夕暮れ時に感じる寂しさと重ね合わせ、暗闇が押し迫ってくる様子で表現した。《紫陽花の刻》・《うつろひ》・《憂愁》では、葉や花びらの儂く散りゆく美しさと、積もり朽ちていく虚しさを描き、美しさの中の悲しさと、悲しさの中の美しさを表現した。

どの作品もすべての美とは「はかなさ」のもとに成り立ち、瞬間的なものであり不思議な存在である事を前提に創作したものである。

2 学位論文審査の要旨

本研究は京都文化博物館所蔵「誓願寺門前図屏風」(以下、本作品という)の制作当時の姿を模写という実技的手法を用いて推定復元するものである。

本作品の作者は、先行研究から岩佐又兵衛かその周辺画家であるとされている。現在は二曲一隻だが、制作時はより大きな画面であった可能性も示唆されている。屏風裏面には「屏風八九/岩佐勝以/京洛風俗/一双之内」との貼紙があるが、改装が行われた後に付されたものと思われる。作品の現状は色彩が黒ずみ、欠損、汚損、後補も多く、制作時の全体像を想像することが困難な状況である。しかし、近世初頭の京都の都市景観を捉えている点で貴重な作例である。

筆者は、「本研究ではこのような傷や汚れを取り除き、限定的ながら図様を復元することで、描かれた当時の絵画の印象を取り戻すことを」目的とした。

そのために論文では美術史的、科学的、実技的な視点で検証を行っており、作者、色彩・技法、都市・人物などの表現、構図・形式について論じ、推定を行った。

本研究で得られた結論、成果は以下の通りである。

(1) 福井時代の又兵衛自身の関与、あるいは舟木本「洛中洛外図」などの制作に携わった絵師が手がけた可能性がある。(2) 色彩、技法については改めて汚損、欠失、後補部分を精査し、類例作品研究の結果から制作当時の線描、図様、色彩を推定して復元した。画面全体に金泥雲と通りの金泥地を施し、装飾性と統一感、生活感に満ちた作品の印象を回

復した。(3) 都市、人物などの表現については改装時に画像の集約などが行われた部分について先行研究を再検討し、町並みの図像的なずれについては地理的整合性や類例作品の検討、赤外線撮影調査で得られたデータによって制作当時の線、形を抽出し、建築物の傾斜角を整理して修正、復元した。(4) 右扇と左扇の紙継ぎの位置がわずかながら上下にずれている点や、図様が連続しない箇所が存在することから、改装によって現在の形になったと考えられるが、料紙の一般的な寸法や屏風作製における装こう技法等の視点を用いて検証を行い当初の構図、寸法を推定した。

本研究は丹念な文献、類例作品の検討がなされ、極めて実証的である。同時に、光学調査など現代的な技術を積極的に用いており、両手法の採用によって説得力を持つ復元研究となった。

また、舟木本「洛中洛外図屏風」(東京国立博物館所蔵)や「豊国祭礼図屏風」(徳川美術館所蔵)に人物、市中表現など類似点を多く見出しながらも、誓願寺信仰を主題とした画面であることを述べており、新たな知見を示した。すなわち、女性、扇、芸能、豊臣家に関わる事物が描き込まれ、角倉邸が堂宇建築であることも指摘している。

以上、本研究は新知見を含む成果を導き、高い水準に達している。このことから今後の研究に大きな貢献をすることも期待される。

【作品】

模写研究：《京都文化博物館所蔵「誓願寺門前図屏風」想定復元模写》

本模写作品は論文に明らかなように様々な文献、類例作品を引きながら、復元のための実証的な検討を行った上で制作されたものである。同時に、損傷の程度が甚だしい画面を推定復元するためには、形態、色彩、構成、全体感、いずれにおいても、作画、材料・技法に精通した創作者としての筆者の経験と視点による洞察が必要であった。

復元された画面からは躍動感溢れる岩佐派特有の人物表現が再現され、この作品が岩佐派の代表的な作品に列せられる水準であることが示された。金地、金雲が施された画面によって、失われた制作当時の印象を再び鑑賞することが可能となり、作品の持つ色彩豊かで活気に満ちた市中図の全体像が明らかになった。その結果、群衆の視線が示す右の画面の存在、あるいは春夏の画題に対応する秋冬場面の存在も強く示唆されることになった。

失われた絵画空間が高質に復元され、歴史資料としての資料性を回復したことで、今後の研究への大きな寄与が期待される。

本作品は実技による古典研究の可能性を示しており、高く評価する。

創作研究：《哀情》、《悲しみを取り除く》、《憂愁》、《紫陽花の刻》、《うつろひ》

「女性美と自然美が織りなす空間の創造」をテーマとした創作研究作品「哀情」「悲しみを取り除く」「紫陽花の刻」「うつろひ」「憂愁」はいずれも若い女性を陰翳深く描いた作品である。

内面の機微や若さや美しさが孕む儂さがやや暗い色調に表現されている。繊細で洗練された衣装を纏いながらも、都会風景や室内ではなく、自然の中に佇む。放置されたようでもあり、草花に抱擁されているようでもある。筆者の審美性が発揮される構成である。繊細で女性らしい視点と感性、そして内省的な画面は筆者独自のスタイルである。

【口頭発表】

「誓願寺門前図屏風」復元研究において本作品が又兵衛本人の可能性も含めた岩佐派の手によるものであり、誓願寺を主題とした市中図であることを、実証的な手法で明らかにした経緯を述べ、十分な説得力を示した。

創作作品研究の発表では、若い女性像に託した夢幻的な絵画世界が筆者の求める審美性に根ざしていることを述べた。主題に即した表現と技法に向き合った真摯な研究態度が伝わる内容であった。

以上のように、宇城氏はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

宇城氏は、「誓願寺門前図屏風」について、きわめて実証的な復元研究を通じて、その作者を明らかにした。また、模写を通じて制作当初の画面を想定復元し、その過程で本作品が誓願寺信仰を主題としていることを示したことで新たな知見をもたらしており、その成果は高く評価される。

「誓願寺門前図屏風」想定復元模写は高質な資料性を回復し、今後の研究に資するものとなった。また、創作研究作品についても自己の絵画世界を確実に構築しつつあるものと認められた。

最終試験において、上記の研究成果について改めて口頭試問を行い、研究が高い水準に達したことを確認した。

よって、この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。